

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：英語文化学科

資格：准教授

氏名：三浦 秀松

研究分野	研究内容のキーワード
言語学、英語学、日本語学、英語教育学	統語論、意味論、音声学、英語教育
学位	最終学歴
博士（言語学） 修士（英語学） 学士（英語学）	ニューヨーク州立大学大学院 言語学部 Ph. D. プログラム（博士課程） 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 『地球の歴史ものがたり』（英宝社）（Christopher Lloyd著: What on Earth Happened）	2014年1月20日	Christopher Lloyd氏の“What on Earth Happened”から近現代史を採録し、編集・注釈を行った上で練習問題を作成し英宝社から出版した英語リーディング教材。レベルは高めで、目安はTOEIC730点程度以上。
2. 『現代英語学へのアプローチ』（英宝社）	2014年1月	第6章「英語の地球的拡散」を執筆した。大英第2系選択必修科目「英語の歴史AB」でテキストとして指定して使っている。英語史や現在注目されている世界英語（World Englishes）に関する記述が多く、英語の史的背景を身に着けさせるには格好のテキストとなっているように思う。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 中学校教諭専修免許状（英語）及び高等学校教諭専修免許状（英語）	1996年3月	大学院で中学校教諭専修免許状（英語）及び高等学校教諭専修免許状（英語）を取得している。実際に高等学校で英語を教えた経験もあり、高校と大学の接続を意識した英語教育の実践に努めている。
2. 中学校教諭免許状（英語）及び高等学校教諭免許状（英語）	1994年3月	中学校教諭免許状（英語）及び高等学校教諭免許状（英語）を取得している。実際に高等学校で英語を教えた経験もあり、高校と大学の接続を意識した英語教育の実践に努めている。
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 『Grammatical Relations, Reflexives and Pseudo-raising in Japanese.』	単	2008年05月	University at Buffalo, The State University of New York	ニューヨーク州立大学バッファロー校言語学部大学院に提出した学位論文。「役割と参照文法（Role and Reference Grammar; Van Valin and LaPolla 1997）」を枠組みとして利用し、英語と日本語の「文法関係」、「再帰構文」、「（擬似）上昇構文」をそれぞれ分析した。主に日本語と英語を中心とした対照研究。
3 学術論文				
1. On Further Advancement of Linguistic Americanization (査読付)	単	2020年3月	庫川女子大学紀要（第67巻）	2019年度武庫川女子大学英文学会で発表した内容をさらに深め、アメリカ英語の世界諸英語（“World Englishes”）への影響について、コーパスのデータを元に、過去10年間という比較的短期の変化と過去50年間以上の長期的な変化について考察している。また、世界規模のアメリカ英語化については近年多くの研究があるが、多くがスペリングや語彙のレベルに注目しており、本研究では句のレベルに注目して

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 『英語の統語的序数について』（査読付）	単	2019年2月	英宝社『ことばとの対話』	いる点で他の研究と補完する関係にあることを論じている。 英語の序数にthe fifth candidateのような形態的序数とcandidate fiveのような統語的序数が存在することを指摘し、正面から論じられることの少ない、後者について考察した。形態論、言語類型論、言語獲得論などのデータを基に常に基数から序数が派生していることを指摘し、形態的序数から統語的序数を導こうとする従来の分析の問題点を指摘し、独自の移動分析を提案した。分析が正しければ、現代英語にも名詞上昇現象が存在し、また名詞上昇は軽名詞に限られないという二点を併せて指摘した。
3. 『英語の地球的拡散』（査読付）	単	2014年1月	山内信幸、北林利治（編著）東京：英宝社.	『英語の地球的拡散』（『現代英語学へのアプローチ』第9章）を執筆した。ピジン・クレオール、インド英語、シンガポール英語など、世界中で話されている多様な英語について概説している。
4. 『Focus-driven Semantic Reflexivity in Japanese.』（査読付）	単	2012年	Grammar In Cross - Linguistic Perspective. Teruhiro Ishiguro&Kang Kwong Luke(eds.) p89-124. Bern: Peter Lang.	日本語と英語に関して再帰代名詞が目的語として動詞の直後にこれないケースについて、表面上同じ文法現象に見えるものが実は異なる原理に基づくものであり、フォーカス（焦点）という情報構造が異なることによる文法現象であることを論じた英語と日本語の比較言語学研究である。
5. 『英語・日本語・韓国語に見られる単文再帰構文の対照研究』（査読付）	単	2010年7月	『交流は海峡をこえて—文化と文学、そしてことば—』岡地ナホヒロ（編著）p.97-115 岡山：ふくろう出版	日本語に見られる再帰構文の特徴が韓国語にも見られ、これが日本語と同じ原理（反換喩性Antimetonymy）に基づくものであり、英語に働いている原理とは異なることを論じた英語、日本語、韓国語の3つの言語の比較言語学研究である。
6. 『インターネットを併用した入学前教育の実践』	共	2010年10月	徳島文理大学研究紀要(80)	進学率の上昇と少子化が重なり、大学に入学してくる学生の学力低下が問題視されるようになった。入学後にリメディアル教育を行うのはどの大学でも当然のように実施されているが、本研究では、入学後ではなく入学以前に着目した。現在ではインターネットが広く普及しているため、オンラインでの教育も以前に比べて遥かに実施しやすくなっている。そのためインターネットを活用してリメディアル教育を入学前から実施できないか、またどのようにすれば効率的に実施が可能か研究を行った。
7. 『英語診断テストの結果分析：2007年度と2008年度入学者の比較研究』	共	2009年09月	徳島文理大学研究紀要(78)	指導要領が大幅に変化した教育カリキュラムで学んだ生徒が大学に入学する2006年問題についてすでに報告を行っているが、本稿も同じ問題意識に立って2007年度入学生と2008年度入学生の語彙・文法力を調査分析した。文法は全般的に低下しており、特に品詞に関する問題の正答率が低いことに注目した。他には、語彙と文法問題の正答率の相関は0.65程度であり、独立して測る必要があることも分かった。
8. 『英語の「学士力」に向けて：英語をe-learning (NetAcademy2) で学習することに対する学生の意識調査報告』	単	2009年09月	徳島文理大学研究紀要(78)	英語教育の世界でもe-learningの利用は増すばかりであるが、e-learningは人間が相手ではなく、無機質な機会が相手であるので、学習者がe-learningでの語学学習にどのように感じているのかについて情動的な面をアンケート結果を元に分析し報告した。学習習慣の形成に役立つことも分かり、報告は、より有効な利用に向けての一助になると思われる。
9. 『インターネットを利用した入学前教育を実施するための基礎調査結果』	共	2009年09月	徳島文理大学研究紀要(78)	A0入試の拡大に伴い、入学前教育のあり方が問題になっている。インターネットを利用すれば、課題を提示したり、英語担当教員がウェブカムを通して学生と英会話の練習をしたりできる。入学予定の学生は地元の学生とは限らないが、インターネットを利用すればこの地理的な問題も解決できる。インターネットを活用した入学前教育の可能性を、高校や高校生に対して行なったアンケート結果のデータを基に、調査報告した。
10. 『言語類型論から見た日本語と英語—WALSについて』	単	2006年9月	徳島文理大学研究紀要(72)	世界には6000から7000の言語があるとされており、それらをタイプ別に分類する言語類型論という言語学の分野がある。研究者の努力により2005年にWorld Atlas of Linguistic Structure (WALS; 『言語構造の世界地図』)が刊行された。その学問上の意義を、従来から言われていた日本語と英語の対照研究を再検証する形で論じている。
11. 『日本語の再帰表現における反局所性について—反換喩性の原理—』（査読付）	単	2004年	『言語研究の接点』（英宝社）	日本語では再帰代名詞を単純他動詞文の目的語に用いて再帰表現を形成することができない。日本語の再帰構文に見られる現象はオランダ語などとはその原理が異なることを示し、次に、日本語は、反換喩性 (antimetonymy) に基づく (他) 動詞の選択制限によるものであり、再帰構文や再帰代名詞そのものに起因する現象ではないことを例証した。
その他				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 産学連携によるグローバル人材の育成 — 国際業務力からの実践的な英語教育の接合 —	共	2020年2月21日	第4回 研究成果の社会還元促進に関する発表会 口頭発表(武庫女ステーションキャンパス レクチャールーム)	英文では産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指しており、すでに本学科で行われてきた就職セミナー、サービスマーケティング、企業研修といった「キャリア教育」への取り組みを有機的に接合するため、学生のキャリアに関する学修成果をeポートフォリオに組織化し、エンプロイアビリティを設計しているこれまでの結果を報告した。
2. 『アメリカ英語の諸英語への影響について』	単	2019年6月22日	武庫川女子大学英文学会令和元年春季大会	冷戦終結後アメリカが唯一のスーパーパワーとなり政治、経済、文化といった各分野で影響力を及ぼしてきた。このことがアメリカ英語が世界各地の英語にも影響を及ぼしていることをコーパスのデータを使って10年前と現在との比較をした。
3. 『英語の統語的序数について』	単	2018年2月1日	同志社ことばの会2017年度年次大会(会場:同志社大学今出川キャンパス)	英語の序数にthe fifth candidateのような形態的序数とcandidate fiveのような統語的序数が存在することを指摘し、正面から論じられることの少ない、後者について考察した。独自の移動分析を提案し、分析が正しければ従来の説の中に否定されるものがでてくることを指摘した。
4. 『言語学入門 — 文法研究の基礎を中心に—』	単	2012年6月30日	武庫川女子大学英文学会	言語学の略史と基礎概念の説明を行った上で近年の進展についても発表した。特に、チョムスキーを創始者とする生成文法が、一般に考えられている言語学の枠組みを超えて、言語進化の領域にその興味の対象を拡大していることを指摘し、最新の生物学と言語学が融合した生物言語学の動きについて述べた。
5. 『大学1年生の英語習熟度について』	単	2009年6月28日	四国英語教育学会(鳴門教育大学)	過去5年間行ってきた英語教育に関する取り組みを報告した。特に、毎年実施している英語習熟度テストから見えてくる入学者の英語力とそれに対してどう対応していくか今後の展望を論じた。特に、過去4年間、異なる年度に入学してくる学生の間に、英語力に関して有意に差が見られるか比較検討を2回行った。2回とも、「低下傾向」は見られるが、こちらも有意な差はみられなかった。英語力は必ずしも低下しているのではなく、英語学習の「多様化」ということが実態ではないかと指摘した。
6. 『英語学習量再考: 韓国とのTOEFL30点差から考える』	単	2009年11月21日	JACET九州・沖縄支部(第93回東アジア英語教育研究会)	TOEFLの平均得点に関して日本と韓国には埋めがたい点差があり、社会背景の違い、学習動機の違い、指導法の違いなど、その理由には諸説あるが、より単純に、小学校で英語が導入されているかどうかという英語学習量(learning/exposure)の問題ではないかという可能性を指摘した。従来のシステムの中で学習量(learning/exposure)を自主的・自律的に増やすにはどうすればいいか、そもそもそれは可能なのか、こういった学習「量」の問題を中心に考察した。
7. 『意味的再帰性条件("Condition R")再考』	単	2008年11月29日	日本言語学会第137回大会(会場:金沢大学角間キャンパス北地区)	再帰構文の表す再帰性には、主語と目的語が表す参加者が一致する意味的再帰性と一致しない近似的再帰性がある。Lidz(2000, 2001)は、意味的再帰性は動詞の語彙レベルで再帰性(語彙的再帰性)がある場合にのみ保証され、そうでない場合は近似的再帰性の可能性が生じると指摘し、意味的再帰性と語彙的再帰性の間には双方向条件があるとしている("Condition R")。しかし、日本語では語彙的再帰性を持たないと思われる動詞でも意味的再帰性だけが解釈可能で近似的再帰性の解釈が困難な例が存在する。これは、語彙的再帰性は意味的再帰性を保証するが、その逆は必ずしも成り立たないことを示唆している。Lidzの唱える「意味的再帰性の条件("Condition R")」は、双方向条件から一方条件へと弱められるべきであることを主張した。
8. 『有声促音の音声特徴に関する一考察』	単	2006年8月26日	The Japan Foundation, Toronto (Toronto, Ontario, Canada)	日本語には「バッグ」などにみられるように有声促音が存在すると考えられる。有声促音の「有声性」がどのような音響音声学的特徴を持っているかは明確な答えが出ていない。解明を目指して実験を行った。その結果に関する音響音声学的な分析について報告をこなした。
9. 『Against raising analysis in Japanese: juncture mixture and multiple projections』	単	2006年10月1日	University of Leipzig (Leipzig, Germany)	日本語と英語で「上昇構文(Raising construction)」とされている例を比較し、英語は上昇構文と言えるが日本語は上昇構文とは異なり、コントロール構文として分析の方が妥当であることを主張した。
10. 『日本語再帰表現再考』	単	2004年10月9日	表現学会近畿例会	日本語では再帰代名詞を単純他動詞文の目的語に用いて再帰表現を形成することができない。日本語の再帰構文に見られる現象はオランダ語などとはその原理が異なることを示し、次に、日本語は、反換論

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
11. 『日本語に再帰構文は存在するか？』	単	2003年11月12日	日本言語学会第127回大会（大阪市立大学杉本キャンパス）	性（antimetonymy）に基づく（他）動詞の選択制限によるものであり、再帰構文や再帰代名詞そのものに起因する現象ではないことを例証した。 サモア語における再帰構文の存否をめぐる学者の間で議論があるが、本発表では日本語にも類似の問題があることを指摘し、「*太郎は台所で自分を切った（てしまった）」のような文に見られる日本語の反局所性（antilocality）の問題を考察した。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 「アメリカ英語の諸英語への影響について—2008年と2018年のコーパスデータの比較から見えてくるもの—」	単	2020年3月	Newsletter (No. 36) Department of English, Mukogawa Women's University	2019年度武庫川女子大学英文学会で発表した内容をまとめたものです。冷戦終結後、唯一のスーパーパワーとしてアメリカが政治、経済、文化といった各分野で影響力を及ぼしており、このことがアメリカ英語が世界各地の英語にも影響を及ぼしていることをコーパスのデータを使って示しました。特に、10年前と現在との比較について論じています。
2. 産学連携によるグローバル人材の育成 ～国際業務力からの実践的な英語教育の接合～	共	2020年2月	第4回 研究成果の社会還元促進に関する発表会資料 (p25-32) (武庫川女子大学教育研究社会連携推進室)	本稿では、産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指す。すでに本学科で行われてきた就職セミナー、サービスマナー、企業研修といった「キャリア教育」への取り組みを有機的に接合するため、学生のキャリアに関する学修成果をeポートフォリオに組織化し、いかにエンプロイアビリティを設計するか論じている。
3. 『言語学入門：文法研究の基礎を中心に』	単	2013年3月	Newsletter (No. 29) Department of English, Mukogawa Women's University	2013年度武庫川女子大学英文学会で発表した内容をまとめたものです（「1. ことばに関する質問」、「2. 世界の言語の数」、「3. ことばに対する二つの態度」、「4. 規範文法」、「4. 記述文法」、「5. Cobuild」、「6. Longman」、「7. 歴史主義」、「8. 構造主義」、「9. 相対主義」、「10. 普遍主義」、「11. 研究手法」、「12. ことばに関する根源的問い」、「13. まとめ」）。
6. 研究費の取得状況				
1. 『インターネットを併用した入学前教育の実践』	共	2008年4月	『特色ある教育研究』（代表：松村豊大 採択番号20特-1）	A0入試の拡大に伴い、入学前教育のあり方が問題になっている。インターネットを利用すれば、課題を提示したり、英語担当教員がウェブカムを通して学生と英会話の練習をしたりできる。入学予定の学生は地元の学生とは限らないが、インターネットを利用すればこの地理的な問題も解決できると考え、可能性を調査した。2009年に発表した論文（『インターネットを利用した入学前教育を実施するための基礎調査結果』）で研究結果を報告した。
2. フィンランド・メソッドを採り入れた英語プレゼンテーション能力育成法・評価法の確立	共	2008年～2010年	科学研究費（研究課題/領域番号：20530870；研究種目：基盤研究(C)）	フィンランド・メソッドは「〇〇すれば〇〇の点数が何点上がる」というような、単なるハウツーものではなく、破綻した国家の経済を個々の「生きる力」で集団的に建て直そうとする理念にまで直結しているところがある。この理念に基づく観点から、コミュニケーション力・読解力などを再認識する説明手順を整え、特に英語で行うプレゼンテーションにおける採点基準をある程度まで確立し、授業の演習や学内のコンテストで活用した。
3. 『TOEICを有効活用した自律学習支援のための英語教育プログラムと学習到達度評価システムの開発』	単	2007年4月	『特色ある教育研究』（代表：三浦秀松 採択番号：20特-301）	アルク社のeラーニングソフト「Net Academy」を利用して、学生の英語学習量の増大を図った。教養の英語科目で、スケジュールを設定し、毎週一定量の学習を行わせ、期間最後にはアンケートを実施した。研究結果は2019年に発表した論文（『英語の「学士力」に向けて：英語をe-learning（NetAcademy2）で学習することに対する学生の意識調査報告』）で報告を行った。
4. 『日本語・韓国語・英語およびその言語文化・言語教育に関する対照研究』	共	2007年4月	『特色ある教育研究』（代表：篠田裕 採択番号：19共-211）	語学と文学を専門とする研究者が、日本語・韓国語・英語に関連するトピックについて協同で研究を行った。研究論文は各自で執筆を行い、成果は2010年に発表した論文集で結実した（『交流は海峡をこえて—文化と文学、そしてことば—』）。私自身の研究結果は同書所収の論文（『英語・日本語・韓国語に見られる単文再帰構文の対照研究』）で発表した。
5. コンパクトシティ教育拠点構想における実践英語能力ステップアッププログラム	共	2007年～2009年	文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託プログラム（整理番号133）	大学・短大を地域の生涯学習の拠点として機能するものとしてとらえ、コンパクトシティという概念のもと、総合的な学びの場を提供することと目的に、同時通訳の訓練やCALL教室を利用した英語教育など

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
			5)	、実験的・実践的な試みを行った。文部科学省からの委託プログラムとして実施された。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2019年5月18日	日本比較文化学会第41回全国大会・2019年度日本比較文化学会国際学術大会研究発表司会
2. 2016年2月11日	同志社大学「ことばの会」2016年度年次大会研究発表司会
3. 2012年4月～現在	日本比較文化学会『比較文化研究』査読委員
4. 2012年4月～現在	武庫川女子大学英文学会『Mukogawa Literary Review』査読委員
5. 2011年11月27日	大学英語教育学会（JACET）関西支部40周年記念大会開催校実行委員
6. 2010年4月～現在	日本比較文化学会 広報委員
7. 2006年4月～2010年3月	日本比較文化学会中四国支部理事